

図書案内

2022年 6月号

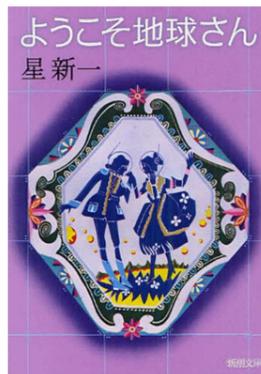
担当 3-2 細川 3-6 地田

梅雨

晴れの日が比較的多く、過ごしやすかった5月も終わり、梅雨の足音が近づいてくる6月となりました。みなさんは、雨の日が好きですか？外で活動することが出来ないから嫌いだと言う人もいれば、直射日光が当たらないから好きだという人もいるでしょう。6月号では、「梅雨」をテーマにして、物語に様々な彩りを加える「雨」が出てくる話を集めました。雨が降って外へ出られない日は、「知のワンダーランド」で本を借りて、読書はいかがでしょう？



『ようこそ地球さん』星新一



紀元4000年頃の、一面が氷河に覆われた惑星の話です。氷河で覆われていて食糧の確保が難航する中、タイムマシンを開発した人が恐竜の存在していた時代へ狩猟に出かけます。

星新一さんらしいとても短い物語なので、忙しい中部高校生でもさっと読むことができます。さらにその短い物語の中にも、星新一さんの現代社会への懸念や警鐘を垣間見ることができます。読後に深く自分たちの行動を考えさせられるこの本、是非読んでください。(地田)

「・・・このところ、おなかいっぱい食事なんかしたことないんじゃないの？」
「そんなことは、おれの責任なものか。むかしの連中がいけないんだ。やつらは自分たちだけ腹いっぱい食ったあげく、なんの対策も残さず、未来人はクロレラを食べなんてぬかしたそうだ。」

雨の匂いの正体

みなさんは雨の匂いを感じたことがありますか？匂いが好きな人もいれば、苦手な人もいるかもしれません。しかし、本来雨は無味無臭であるのに、どうして匂いを感じるのでしょうか。まず、降り始めに感じる雨の匂いはペトリコールと呼ばれ、雨粒が地面や植物の葉に衝突し生まれた気泡（エアロゾル）が原因です。エアロゾルは植物由来の油が付着し、乾燥した土壌や岩石に当たり、その成分を取り込んだものが空気中に巻き上げられて匂いが生まれているのです。次に、雨上がりの匂いはグオスミンとよばれ、土の中の細菌による有機化合物の匂いが雨水によって拡散することで生まれます。このように様々な理由で、私たちは雨の匂いを感じているようです。今年の梅雨は、雨の匂いに注目してみたいはいかがでしょう？

『レインツリーの国』有川浩



昔読んだライトノベルの衝撃のラスト。自分以外はどう感じたのか気になって検索した伸行は、あるブログに会う。興味を持った伸行は管理人である「ひとみ」にメールを送り、二人は意気投合していく。実際に会う約束をしたが、「ひとみ」にはある秘密がある・・・。

悲しい過去や思い込みですれ違いながらも、相手に向き合おうとする二人の成長に注目です。(細川)

でも、伸とひとみにはまだ始まったばかりで、その恋が未練に終わるかどうかは誰にも分からないのだ。

『言の葉の庭』新海誠



それぞれの悩みを抱えた2人が、雨の降る公園で出会い、徐々に心を通わせてく物語です。その後、2人は互いの存在を励みとして少しずつ悩みを解消させていきます。2人の様子が、その周囲の人物も含めて交互に描かれることにより、時間や人々の心情が変化していく様子が伝わります。また、物語の途中に人々の感情を表現するための和歌が掲載されているので、和歌を学ぶこともできます。新海誠さんが描く、彩り豊かなこの本をぜひ読んでください。(地田)

雷神の しまし響もし さし曇り 雨も降らぬか 君を留めむ

『天気の子』新海誠



家出をし、東京にやってきた帆高。そこで出会ったのは不思議な力を持つ陽菜だった。彼女は空に向かって祈るだけで、天気を晴れに変えることができるのだった。帆高たちは天気を届けるサービスを始めるが、陽菜の力にはある危険があった・・・。

たくさんの生涯がありながらも陽菜のために走る帆高や、そんな彼に影響を受けていく大人たちの物語。美しい空の情景描写が彩りを添えてくれます。(細川)

世界なんてさ、どうせもともと狂ってんだから。



(<http://weathers.jp/s/topics/202006/260095>)